

第4章

展 望

1. 小学校から見た展望（事例を通して）

和田 信行 委員

保小連携の取り組みが実施される地域が着実に増えてきています。これは、保小連携の意義を子どもの成長や学びの連続性の視点から捉え、保育所や幼稚園の5歳児後半のアプローチカリキュラムと小学校1年生入学後のスタートカリキュラムをどのように繋げ、実施していくかが理解され、その実施方法が保育所、幼稚園、小学校に広められているからであると思われます。

スタートカリキュラムの研究・実施が先進的な研究校から始まり、現在では各地の教育委員会もその取り組みを先導しています。しかし、スタートカリキュラムについての認識はまだ充分とは言えません。「段差はあって当たり前」とか、「段差は乗り越えるもの」といった乱暴な言い方で無視をしてしまうケースもあります。アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムについて、幼児教育関係者や小学校教育関係者が正確にその必要性や意義を認識し、多くの保育所や幼稚園、小学校でのカリキュラム上も、子どもの成長や学びにおいても、滑らかに接続されることが大切です。

本章では、これからの保小連携を展望するにあたり、先進的な実践事例を通して考えていきたいと思います。

事例1：行政がかかわっての仕組みづくり

事例2：埼玉県の接続期プログラムから

事例3：スタートカリキュラムの方法と効果について

これらの事例を通して、今後の保小連携の在り方、推進の方法、効果の検証について考えていきます。

(1) 行政がかかわっての仕組みづくり（東京都足立区 参照：33ページ）

1) 保小連携はだれが推進するのか

事業を推進していく場合、トップダウン型とボトムアップ型とがあります。保小連携を現場の保育所や小学校の自主的、自発的な取り組みを積み上げていく方法もあるでしょう。これがボトムアップ型です。この方法は、全体に広まるまで時間がかかります。これに対して、行政が主導し、方向性を明示して組織的に取り組む保小連携の方法もあります。これがトップダウン型です。この方法の良さは、全市町村で一斉に実施する場合に力を発揮します。

本来は、保小連携の必要性を保育士や先生方が感じ、その方法を考え、試行錯誤しながら、

各校園が工夫をしながら実施していくことが必要なのでしょう。行政が全ての保育所、小学校で一斉に同じことをするのに抵抗感のある方もおられるかもしれません。

ここで取り上げる東京都足立区の取り組みは、行政がかかわって仕組みづくりをしたことにより、保小連携が格段と推進された事例です。

2) 行政がかかわることの意義

行政には組織を動かす力があります。園長会、小学校校長会などの組織を活用することができます。また、公立だけでなく私立の園に対しても協力をお願いすることができます。行政が保小連携の必要性を感じ、スピード感をもって対応しようとする大きな事業展開が可能となるのです。

3) 幼保小連携ブロック会議

足立区では、小学校長会や様々な学校間の連携行事などで使われてきた組織・ブロックを活用し、平成18年度より「幼保小連携ブロック会議」を行っています。区内には73の小学校がありますが、4～7校をひとつのブロックとして、全13ブロックに分かれています。

この小学校のブロック内にある公立私立の保育所・幼稚園がメンバーとなり、連携活動が行われています。この活動を推進しているのが、足立区の子ども家庭部です。子ども家庭部は私立幼稚園や公私立保育所を所管していますが、平成23年度に教育委員会に編入されたことにより、公私立の保育所、幼稚園、小学校が一体となって子どもの発達と学びの連続性を求めた連携が一層推進されるようになっていきます。

4) 小学校との連携研修

教育委員会主催の研修会では、保育所の保育士、幼稚園や小学校の教員と一緒に研修を受けます。保育士や教員間の連携が叫ばれていますが、一緒に研修を受ける所は全国的にまだ少ないように思えます。足立区では、保育や授業をお互いに参観したり、参観後に協議会や事例検討会を行っています。ブロック内の保育士と教員が顔見知りになることは、連携の初めの一歩です。そのような機会、場を教育委員会が設定しているところに、行政としての役割意識を感じます。

5) 小学校校長会

そして、このような保幼小の連携を、小学校長会が全面的にバックアップしていることは大変素晴らしいことです。小学校校長会は、ややもすると中学校との連携に重きを置き、保幼小の連携に消極的な地区も多いのではないかと思います。しかしながら、行政と校長会が保幼小連携の意義をしっかりと感じ取ってこれを推進しているからこそ、素晴らしい成果を上げるこ

とができるでしょう。

行政がかかわっての仕組みづくりは、区内、市内全域を上げて 保幼小の取り組みを推進していくような場合には威力を発揮します。とりわけ、先進的な取り組みをしている東京都足立区や熊本県合志市の取り組みは参考になります。

(2) 埼玉県の接続期プログラムから

1) 埼玉県の保幼小連携の取り組み

埼玉県教育委員会では、平成23年度に「接続期プログラム」を作成しました。筆者が監修者としてかかわった埼玉県の「接続期プログラム」を紹介します。埼玉県では、幼児期の教育から小学校教育への接続を一層円滑にするため、様々な取り組みを行ってきました。平成21・22年度には「保・幼・小連携体制研究」に取り組み、同22年度には「小学校入学までに子どもたちに身に付けてほしいこととして、子育ての目安「3つのめばえ」を策定しました。

「3つのめばえ」とは、

- 1 「生活」 ・健康で安全な生活をする
・自分のことは自分でする
・物を大切にする
- 2 「他者との関係」
・人とかかわる力を身につける
・言葉で伝え合う
・きまりや約束を守る
- 3 「興味・関心」
・好奇心や探求心をもっていろいろなものにかかわる
・文字や数量などの感覚を豊かにする
・自分の思いを表現する

これを受けて、平成23年度には、川口市、鳩山町、秩父市、加須市において研究することとなり、研究協力園が設定されました。これらの4つの地域の保育所や幼稚園、小学校は連携しながら、具体的なアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの作成・実施を行いました。そこには、前述のとおり、保幼小連携に県の教育委員会が積極的にかかわっています。県内の全ての公私立保育所や幼稚園、小学校にとって、行政が保幼小の連携を具体的な方法で推進していくことは、その方向性についての見通しが持てることとなります。埼玉県ではこれらのカリキュラムを実施した成果について、平成24年度に実践事例集としてまとめる予定となっています。

2) 接続期プログラムの内容 (参照: 10ページ)

①アプローチカリキュラム

アプローチカリキュラムとは、「小学校の学習や生活に滑らかに接続できるよう工夫された、保育所や幼稚園年長児後半の指導計画」のことです。埼玉県のアプローチカリキュラムは年長児の1月から3月までを計画しています。この、アプローチカリキュラムを作成するにあたっての配慮すべきことと工夫のポイントを6点にまとめています。

i 時間の工夫

修了近い時期には、小学校での生活に配慮して、クラス全員で活動することを意識的に取り入れるようにします。登降園時の活動や当番活動、昼食の準備・片づけなど一日の生活の流れが分かり、自分から進んで行動できるようにします。

ii 保育の工夫

友達と目的を共有し役割を分担して一緒に遊ぶ中で、充実感や達成感を味わい、意欲的に生活できるようにします。自然の素材や自然現象などを遊びに取り入れ、自然の不思議さを十分に体験できるようにします。友達と一緒に遊ぶ中で、考えたり試したり工夫したりする経験が十分できるようにします。友達と互いに表現し合いながら、歌や動き、描画、言葉など様々な表現のおもしろさを感じることができるようになります。

iii 人間関係の配慮

友達と共に生活する中で、互いのよさを分かり合い、信頼関係を十分に築くようにします。行事などをおして、年少児や地域の人々とかかわる機会を設け、いろいろな人に親しみをもてるようにします。

iv 家庭との関係

基本的な生活習慣を身に付けて自分でできるように、家庭と連携をとり、子どもの育ちを確かめます。保護者会や個人面談などを行い、保護者に小学校入学までの生活の見通しを伝えます。保護者の不安に対しては、小学校と連絡を取り合って対応できるよう園所の体制を整えます。

v きまりへの適応と安全への配慮

友達と共に気持ち良く過ごすためにはルールが必要であることがわかり、守ろうとする気持ちを育みます。友達と共に生活する中で自分の気持ちを伝えたり、時には折り合いを付け、自分の気持ちを調整したりすることを経験できるようにします。お別れ遠足では、交通ルールを

守って行動することや、公共の場での行動の仕方などを知らせます。

vi 小学校生活に向けての配慮

小学生と交流することをおして、あこがれの気持ちを抱き、小学校生活に期待を持てるようにします。学校見学や学校体験をおして、小学校の施設や生活の様子を知り、入学への期待と自覚を持てるようにします。幼児期における指導の経過を要録にまとめ、小学校へと引き継ぎます。子育ての目安「3つのめばえ」を活用し、子どもの育ちを確かめます。

②スタートカリキュラム作成のために

スタートカリキュラムとは、「小学校の学習や生活に滑らかに接続できるよう工夫された1年生入学当初の指導計画」のことです。埼玉県では小学校入学当初から5月までを計画しています。

時間割の工夫、授業の工夫、人間関係の配慮、家庭との連携、きまりへの適応と安全への配慮、幼児期の経験を生かす配慮等、生活科を核とした合科的な指導を取り入れることで、子どもの思いや、願いの実現に向けた活動を、ゆったりとした時間の中で進めます。

i 時間の工夫

モジュール学習を取り入れ、子どもの実態に応じて、徐々に45分の授業に慣れるようにします。

ii 授業の工夫

体験的な活動や操作などを取り入れることで、これまでの子どもたちの経験が生かされ、分かりやすい授業となり、学習意欲が高まります。子どもたちができることを認めたり、励ましたりして満足感・充実感をもって学習できるようにします。専科、学習補助員などが授業に入ることで、一人一人の子どもにきめ細やかに対応します。

iii 人間関係の配慮

学年やグループなどの活動を取り入れることで、親しい友達とのかかわりを軸に子ども同士の間関係が広がります。学校生活の始まりには、子どもたちが不安を感じがちです。日々の健康観察や下校時に一言声を掛けるなど、子どもとの信頼関係を築くことを心がけます。

iv 家庭との連携

入学式や懇談会の他、連絡帳や学級だよりなどで家庭との連携を図ります。小学校生活に関

するアンケートを実施し、子どもたちの課題や、保護者の不安を把握し、指導に生かします。

v きまりへの適応と安全への配慮

子どもたちが友達と集団で生活しながら、きまりやルールの必要性や大切さについて、体験をとおして身に付けるようにします。きまりやルールは、安全面に関するものを優先的に指導します。特に登下校では、子どもが自分の眼で危険を予測し、安全に行動することができるように、場面や状況に即した安全な行動を具体的に教えます。

vi 幼児期の経験を生かす配慮

入学までに子どもたちが経験したことや身に付けたことを生かすことで、意欲をもって学習することができます。子どもたちは、園で決められた約束を守って固定遊具で遊ぶことや、大勢の友達と遊びながら自分たちのルールを作ったり、変えたりしながら楽しく遊ぶことなどを経験しています。環境の違いや個人差が大きいことを踏まえ、一人一人の姿をよく見つめながら、子どもたちができることや経験していることを生かした授業を行います。

3) 研究指定校・研究協力園の取り組み

①秩父市教育委員会・秩父市立吉田保育所・秩父市立吉田幼稚園・秩父市立吉田小学校

幼児は1年間を通して小学校とかかわりながら、小学校への期待感を高めていきます。保幼小が隣接しており、小学校校長は幼稚園の園長を兼務しているため、大変進んだ幼小連携が実施されています。

《吉田幼稚園のアプローチカリキュラム》

Stage 1（4月～8月）興味をもつ段階

- ・小学校校庭散策
- ・小学校周辺散策
- ・小学校1年生授業参加
- ・小学校2年生授業参加など

Stage 2（9月～12月）慣れ親しみをもつ段階

- ・小学校運動会参加
- ・1、2年生の体育見学
- ・生活科の授業参加

Stage 3（1月～3月）期待感を高める段階

- ・1年生の授業参加

- ・小学校1日入学

《吉田小学校のスタートカリキュラム》

【第1週のねらい】1年生になったことを喜び、話を聞くことを少しずつ覚えながら、小学校1年生の生活について不安がなくなり、楽しく過ごすようになる。

【第2週のねらい】学校で友達と過ごすことやみんなで過ごすことに関心を持ち、楽しく遊んだり、学習に取り組むようになる。

【第3週のねらい】学校での学習や、みんなと一緒に活動することに関心をもって意欲的に取り組むようになる。

【第4週のねらい】学校での生活に慣れ、学校探検やいろいろな学習を楽しみにして取り組むようになる。また祝日などがあっても落ち着いて過ごせるようになる。

このように、小学校生活が始まってから徐々に、学校生活への適応、友達とのかかわり、学習へ興味や関心が高まるよう工夫されています。具体的な4週間の指導計画まで作成されているため、各学校でスタートカリキュラムを作成するときの参考になります。特に、「はじめのこくご」、「はじめのさんすう」など、教科のスタート学習にも取り組んでいるところがよいと思います。

②加須市教育委員会・加須市立第三保育所・加須市立志多見幼稚園・加須市立志多見小学校

第三保育所と志多見幼稚園、志多見小学校では、接続期を3つに分けています。接続前期（年長児1月～3月）、接続中期（1年生4月～5月上旬）、接続後期（5月中旬から7月）

《志多見幼稚園のアプローチカリキュラム》

（1月～3月の学びの概要）

- ①自分の力を発揮する。
- ②不思議に思ったことを調べたり試したりする。
- ③友達と協力しながら遊びや生活をすすめて充実感を味わう。
- ④互いの成長を喜び、就学に期待をもつ。

「3つのめばえ」を意識した環境・支援・援助をしている。

- ・正月遊びをする。（言葉・健康）
- ・冬の自然現象に関心をもつ。（環境・健康）
- ・生活発表会をする。（表現・言葉）
- ・小学校1日入学体験（人間関係）
- ・幼稚園生活を振りかえる。（言葉・人）

《志多見小学校のスタートカリキュラム》

①どきどきわくわく1年生

- ・「たのしいがっこう」
- 「すきなものをかいてしょうかいしよう」など

②生活科を中心にした活動

- ・がっこうたんけん
- ・なかよくなりたいな

生活科+図工、生活科+音楽等の合科的な手法を取り入れている。

③弾力的な学習時間、学習展開の工夫

- ・モジュール、合科などにより幼児期の遊びから小学校の学習への滑らかな接続をすすめている。

(3) スタートカリキュラムの方法と効果について

(北区立西が丘保育園・北区立うめのき幼稚園・北区立梅木小学校)

調査対象となった上記3校園は、平成21～23年度の3年間、筆者がかかわった「東京都教育委員会就学前プログラム及び就学前カリキュラム実証研究事業」の連携協力機関として指定を受けました。この事例では、スタートカリキュラムの実施とその効果について検証を行い、この時の実践指導結果を基に、以下の研究を行いました。一点目はスタートカリキュラムの考え方や実践の方法を明らかにしていくこと、二点目はスタートカリキュラムの効果についての客観的な検証です。

スタートカリキュラムの実践事例については様々な研究が行われていますが、その客観的な検証事例については、これまで見あたりませんでした。以下、この研究の詳細について述べてみます。

1) スタートカリキュラムの考え方

①生活科の役割

就学前の教育や保育と小学校低学年の接続の問題については長い間議論されてきましたが、その段差を埋める新しい教科目である「生活科」が平成元年に誕生しました。この教科目が誕生した当初は、授業の開発に大変な努力を要することとなりました。小学校の教員は幼稚園に出かけてその指導内容や指導法を学び、「遊びを中心にした総合活動」と「教科書による教科学習」の違いや、「教師主導で注入式の小学校教育」と「子どもの思いや願いを生かす幼児教育」との違いに唖然としたものです。「生活科」は元来、幼児教育と小学校教育の滑らかな接続のために誕生した教科目です。ですから、「小1プロブレム」と問題が叫ばれている今こそ、

「生活科」の原点に帰って、保幼小の連携や滑らかな接続に力を発揮していくべきではないでしょうか。しかしながら、生活科1教科目だけで、今日的な小学校1年生の問題に対応していくことには無理があります。そこで、生活科を中心としたスタートカリキュラムが必要になってくるのです。

②スタートカリキュラムとは（参照：10ページ）

スタートカリキュラムとは、「小学校の学習や生活に滑らかに接続できるよう工夫された1年生入学当初の指導計画」のことです。期間は、入学式後1～2週間、4月～5月の連休明けまで、1学期間など、小学校によって幅があります。また、内容的にも、学校生活への適応型、生活科を核にしたモジュール型、教科解体の総合型といった様々な方法で行われています。入学式直後から教科書による教科学習、45分で5分の休み時間では、保育園や幼稚園から入学してきた児童にとって大きな段差となります。もちろん、段差を乗り越えられる子もいますし、段差が必要だと主張する者もいます。一方で、小学校に入学したら国語や算数の勉強をしたいという子がいるのも事実です。

ここで紹介するスタートカリキュラムは、東京都新宿区立四谷第三小学校での実践（平成17・18年度新宿区教育委員会研究発表校）がベースになっており、その実践の特色は、次の2点です。

i 遊びを取り入れた楽しい活動

様々な保育園や幼稚園から入学した児童に人とのかかわりを持たせるには、楽しく自信をもって取り組める活動が必要です。そこで入学当初には、それぞれの保育園や幼稚園での経験を引き継いだ、以下のような活動を取り入れたいものです。

- ・体育、音楽、図画工作、国語、特活、道徳、生活科等の各科目の時間を、15分や30分に分割（モジュール）して、毎日行えるように工夫する。
- ・鬼ごっこや、ハンカチ落とし、絵描き歌や手遊び、じゃんけん列車、粘土遊び等を工夫し、楽しい活動を行っていく。

この保幼小の接続のためには、小学校の教師も、子どもたちの就学前の活動研究が必要となりますが、実際に保育所や幼稚園に足を運んで学ぶのが一番効果的です。また、保育所や幼稚園の先生方も小学校の教育を見て、保幼小の学びの連続性をつかんでほしいと思います。

1年生の生活のスタートは入学式からではありません。保育所や幼稚園での生活から小学校生活への繋がりへの橋渡しをすることが生活科の使命でもあります。

ii 生活科を核にした合科的な活動

45分単位で授業をしていれば、生活科の授業は週に3回となります。当然ながら、国語や算

数、音楽や体育も45分の授業です。小学校入学当初の児童に、教科書を使って45分単位の授業を進めることはお奨めできません。1年生の指導が上手な先生は、従来から、入学当初の児童の実態に合わせた時程を自然と工夫していました。まさに、スタートカリキュラムを実践していたのです。

この、生活科を核にした合科的な活動の方法は、45分の教科学習のスタイルを子どもの側に立って見直したカリキュラムと言えます。45分を、15分や30分というモジュールにより合科的な方法を組み立てています。生活科15分と国語30分、生活科15分と図工30分という風に組み合わせることにより、生活科を核にした活動を毎日生み出すことが可能となります。

梅木小学校のスタートカリキュラムは、このような考え方で作成されています。以下に、そのスタートカリキュラム（平成22年度版）の1週目と2週目を資料1として示します。

資料1 スタートカリキュラム（部分）

梅木小学校 1年生 スタートカリキュラム

1週目 4月5日～4月9日		<ul style="list-style-type: none"> ○ 担任との関係を作ろう。(児童、保護者) ○ 安心して登校し、過ごせるようにしましょう。 ○ ゲーム、歌、読み聞かせで楽しく過ごそう。 ○ 担任が連絡帳を書く時間（音楽、保健指導時） 						
	5日(月)	6日(火)	7日(水)		8日(木)		9日(金)	
朝			手遊びで和む ♪キャベツの中から		紙芝居 ～読み聞かせ～		じゃんけん ～ゲーム～	
1時間目			学活	あいさつ あくしゅで おはよう	学活	あいさつ あいさつの 歌	学活	あいさつ 名前であい さつ
			学活	朝の支度 ロッカーの 場所	学活	朝の支度 道具箱の使 い方、道具 のしまい方	国語	名前を教え よう
			学活	歩き方、名 前順の並び 方	学活	計測の事前 指導	国語	自己紹介を しよう
2時間め			生活	学校探検 トイレ、下 駄箱	生活	学校探検 保健室	体育	着替え方 しまい方
			生活	学校探検 職員室	行事	養護教諭の お話 身体計測	体育	ならびっこ
			行事	地域班集会			生活	学校探検 校庭
3時間目		行事	音楽	一年生の歌	国語	クレパスで 名前を書く	学活	体育着のた たみ方
			学活	帰りの支度 手紙の配り 方 連絡帳に貼 る(のり)	学活	帰りの支度 手紙のしま い方	学活	週末の帰りの 用意
			学活	下校の仕方 並び方	学活	下校の仕方 並び方	学活	下校の仕方 並び方
4時間目		学活	担任紹介 呼名、学校、 クラス名 保護者の方 へのお話					

	12日(月)	13日(火)	14日(水)	15日(木)	16日(金)					
朝	対面式に参加	紙芝居 ～読み聞かせ～	手遊びで和む ♪お店屋さん	紙芝居 ～読み聞かせ～	じゃんけん ～ゲーム～					
1時間目	生活	学校探検 校庭②	生活	学校探検 屋上	生活	学校探検 音楽室	算数	もうじゅう がりゲーム		
	生活	春、見つけ 桜の花で遊 ぼう	行事	歯科探検	生活	楽しい学校 空に○を描 こう	音楽	楽しく歌お う 「さんぼ」 「校歌」	算数	仲間作りゲ ーム
	図工	花を貼ろ う、描こう		図工	チョークで ○を書こう				算数	出て来た数 字
2時間め	国語	鉛筆の持ち 方	行事	心臓検診	算数	教科書を見 てみよう	学活	おかしもの 約束	国語	ひらがな 「く」
	国語	名前を鉛筆 で書く			算数	なかまをつ くろう	学活	防災頭巾の かぶり方	国語	「うれしい ひ」(3)
	国語	名前の名刺 を作ろう	音楽	楽しく歌お う「さんぼ」	算数	仲間作りゲ ーム	行事	ひなんくん れん	音楽	楽しく歌お う「さんぼ」
3時間目	図工	名刺に絵を 書こう	国語	ひらがなの 練習帳	国語	ひらがな 「つ」	国語	ひらがな 「へ」	生活	2年生 「はじめま して」
	図工	絵に色をぬ ろう	国語	ひらがなを 書く「し」	国語	教科書を見 てみよう	学活	「うれしい ひ」②	生活	交流ゲーム
	生活	楽しい学校 名刺の交換 をしよう	算数	仲間作りゲ ーム	国語	「うれしい ひ」①	学活	くまの絵本 読み聞かせ	生活	グループで 自己紹介
4時間目	学活	給食について(栄養士)	学活	当番の仕方 白衣の着方	学活	待ち方 白衣のたた み方	図工	春の塗り絵 をしよう	生活	あのねカー ドの書き方
	学活	給食の食べ 方	学活	配膳の仕方	学活	食器の置き 方	学活	当番の仕方	生活	カードに書 こう
	学活	身支度 約束 片付け方	学活	片付けの順 番	学活	牛乳パック のたたみ方	学活	食器の置き 方 片付け	学活	食事のマナ ー
5時間目		生活	学校探検 図書室						行事	交通安全教 室 通学路の歩 き方
		国語	読み聞かせ							
		国語	絵本を読もう							

「三つの力」(資料2)については、アプローチカリキュラムの作成においても観点としていました(参照:12ページ)。具体的な視点は違いますが、保育所や幼稚園でもこの「三つの力」を育てていくことが就学前に必要なものであると考えています。

調査対象のうめのき幼稚園でアプローチカリキュラムを経験した新入生は10名程度です。保幼小の連続した接続カリキュラムが望まれるところですが、すべての園児がアプローチカリキュラムを経験しているわけではありません。このため、公私立全ての保育所や幼稚園で、アプローチカリキュラムが実施できることが理想的です。

資料2 就学前に育てる「三つの力」

幼稚園や保育所で	
生活する力	①片付け・整理整頓 ②着替え ③食事 ④トイレ・手洗い ⑤安全（きまりを守る） ⑥生活リズム（午睡は？）
かかわる力	①だれとでも仲良く遊べること ②きまりを守って遊べること ③自分から話ができること ④先生の指示を素直に聞ける子 ⑤暴力をふるわないで解決できること
学ぶ力	①遊びを通して学ぶ力を育てること ・心情、意欲、態度 ・好奇心、探究心 ・思考力の芽生え ②集団生活で自発性や主体性を育てること （協同的な学びを通して） ・協同性の育ち ・人とのかかわり ・言葉と体験（コミュニケーション力）

2) 効果の検証

スタートカリキュラムの効果を検証する際に客観性を持たせることは難しいのですが、その効果を論じるためには必要なことです。今回、西が丘保育園、うめのき幼稚園、梅木小学校、の接続カリキュラム研究に当初からかかわることができましたので、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの開発とその効果について分析してみます。

①スタートカリキュラムの検証（「三つの力」の観点）

前述のとおり、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムについては、「三つの力」をキーワードにして開発することを提案しています。就学前と入学後の子どもの成長や学びの連続性を考える時、カリキュラム作りの基本に「生活する力」・「かかわる力」・「学ぶ力」の3点を据えて考えていく必要があります。

②スタートカリキュラムの有効性について

i 生活科を中心としたスタートカリキュラムの意義

梅木小学校のスタートカリキュラムの特色は、生活科を中心としたカリキュラム作りです。入学直後の活動に、幼児期の遊びを中心とした総合活動との接続を意識した計画を立てています。生活科を核にして、他教科等との合科的・関連的な指導を取り入れています。生活科+国語、生活科+図工等の組み合わせを通して、児童が小学校の教育に慣れていくためのカリキュラムとなっています。このことが、児童一人一人の状況に応じた指導を行っていく上で有効でした。

ii スタートカリキュラムと教師・学校の変容

スタートカリキュラムの準備は、4月になってからでは間に合いません。誰が担任となっても可能となるよう、学校としてのスタートカリキュラムを作成しておく必要があります。梅木小学校では、研究1年目にスタートカリキュラムとアプローチカリキュラム作成を行い、研究2年目の4月に実践に入りました。更に、実践の結果を踏まえてカリキュラム改善の上、3年目の研究発表となりました。(今回の実践は2年目、4月の実践記録です。)

また、スタートカリキュラムの作成を低学年の担任に任せるのではなく、全学年を挙げて取り組むことにより、全教師の意識が変わってきます。梅木小学校のスタートカリキュラムの実施には、1年の担任だけでなく、専科教諭など他の教員も指導にかかわっています。

スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムの研究を保育所や幼稚園と一体となって行ったことにより、教師に変容が見られました。1年1組の男性教諭は、「ゲーム」「手遊び」等、保育所や幼稚園の手法を取り入れ、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの連続性を意識した授業を実践していました。

(4) まとめ

第4章は、小学校から見た展望として、

事例1 「行政がかかわっての仕組みづくり」

事例2 「埼玉県接続期プログラムの取り組み」

事例3 「スタートカリキュラムの方法と効果について」

を取り上げ、保幼小連携の現状と今後の展望を見てきました。

幼児期から児童期の接続については、かなり以前から問題となっていたわけですが、また、厚生労働省の保育所保育指針改訂や文部科学省の小学校学習指導要領改訂により、保小連携の

推進に大きな弾みがついたように感じます。

保小連携は、「小1プロブレムの解消」だけの問題ではありません。子どもの成長と学びの連続性を考える場合、保育所や幼稚園の遊びを中心とした総合活動から、教科を中心にした学習活動への繋ぎが重要な問題であることに、誰もが気付きます。

「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」の3つの力を生かしたアプローチカリキュラムと、「幼児期の遊びを生かした活動」「生活科を核にした合科活動」「教科のスタート学習」を上手に組み合わせたスタートカリキュラムを通して、カリキュラムの接続を考えていくことが大切です。

先進的な取り組みをしている地域、保育所、幼稚園、小学校が増えています。先進的な事例の成果を生かして、この活動を推進して行くことが賢明な方法です。全ての小学校が保育所や幼稚園との連携を前向きに模索しているときです。どちらからということではなく、双方が意欲的に連携に取り組もうとすれば必ず道は開けてくるでしょう。この報告書の事例が参考となることを期待しています。

保育所保育指針 (平成20年3月厚生労働省告示)	幼稚園教育要領 (平成20年3月文部科学省告示)	小学校学習指導要領 生活科編 (平成20年3月文部科学省告示)
第4章 保育の計画及び評価 1 保育の計画 (3) 指導計画の作成上、特に留意すべき事項 エ 小学校との連携 (ア) 子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図るよう配慮すること (イ) 子どもに関する情報共有に関して、保育所に入所している子どもの就学に際し、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校へ送付されるようにすること	第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動などの留意事項 第1 指導計画作成に当たっての留意事項 1 一般的な留意事項 (9) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。 2 特に留意する事項 (5) 幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようすること。	第2章 各教科 第5節 生活 第3 指導計画の作成と内容の取り扱い 1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。 (3) 国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第一学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。

《参考文献・資料》

- 1) 東京都教育庁調査「小一問題・中一ギャップの実態調査について」2011年 東京都教育庁
- 2) 東京都教育庁「就学前教育プログラム及び就学前カリキュラム実証研究事業」2012年 東京都教育庁
- 3) 四谷第三小学校・幼稚園研究紀要「幼児期から児童期への子どもの発達と学びの充実と滑らかな接続」
2006年 新宿区立四谷第三小学校
- 4) 和田信行著「幼小の滑らかな接続についての実証的な研究 2007年本学会誌14号研究論文
- 5) 和田信行著「わくわくドキドキカリキュラム」2008年 学陽書房
- 6) 和田信行編著「生活科新たなるステージへ」2010年 日本文教出版
- 7) 和田信行他監修「しっかり育つしながわっ子」2010年 品川区役所
- 8) 「育ちと学びの連続性」就学前教育と小学校教育の互惠性のある連携と円滑な接続
2011年 梅木小学校・うめのき幼稚園
- 9) 文部科学省「小学校学習指導要領解説・生活編」2008年 日本文教出版
- 10) 日保協研究紀要「保小の連携実践事例集・まとめと展望」2010年 日本保育協会

2. 保育園から見た展望

寺田 清美 委員

本章では、これからの保小連携を展望するにあたって、保育所児童保育要録（以下「保育要録」といいます。）の活用や次世代育成支援も含めた先進的な保小連携の実践事例を通して、今後の保育園における連携のあり方等について述べていきます。

(1) 乳幼児とのふれあい交流活動から見てきたもの

1) 「接触体験」と「観察体験」の有効性

少子高齢化・核家族化に伴う家庭養育機能の低下が指摘されて久しく、その要因の一つが「子どもを知らないまま親になる」ことだと言われています。「大阪レポート」(昭和55年(1980年)に大阪府下の一市に生まれた子ども達を対象にした大規模な子育て実態調査)によれば、「子どもとの接触体験がなかった」親は15%ですが、平成15年(2003年)に兵庫県の一市に生まれた子ども達を対象にした同様の調査「兵庫レポート」では26.9%に増えています。また筆者らが行った調査では、大学生への「赤ちゃん体験」(赤ちゃんとはふれあった体験)の有無について調査したところ、「赤ちゃん体験が全くなかった」という学生の割合は、保育専攻学生以外の一般学生では30%でした。このうち男女別の内訳では、女子学生が30%であったのに対し、男子学生は56%となっています。この結果は、ベネッセ次世代育成研究所による「妊娠出産子育て基本調査」(平成19年)において、「自分の子どもが生まれるまで赤ちゃんとは身近に接した経験がなかった」夫の割合が54.6%であったのとほぼ一致しています。

前述の、大阪・兵庫での両レポートにかかわった原田正文氏は、「半数以上の男子は乳幼児との接触経験がないことになり、接触体験の有無が育児不安やひいては虐待などにも影響を与えている。」と指摘しており、非常に気になる点であります。しかしながら、別の調査(参照:132ページ、文献5)および6))によれば、「男子は乳幼児とのふれあい体験後に好意感情が有意に高くなり、自己効力感も上昇の度合いが大きい。」との結果が出ており、「ふれあい体験」の効果は男子の方が大きいようです。

一方で国の動きとしても、平成15年7月に制定された「次世代育成支援対策推進法」の重点施策の一つとして、「赤ちゃん出会い・ふれあい・交流事業」(小学校や中学校の生徒が保育園に行き園児と遊ぶ、教室に赤ちゃんが来て授業する)があります。

さらに、中学校の技術・家庭科(家庭科分野)において「幼児との触れ合い学習」が、平成24年度より選択科目から必修化されたことに伴い、今後は中学生全員が「接触体験」又は「母

子交流観察体験」により親準備性を身につける機会を得ることとなります。

2) 赤ちゃんとのふれあい交流プログラム例（参照：68ページ）

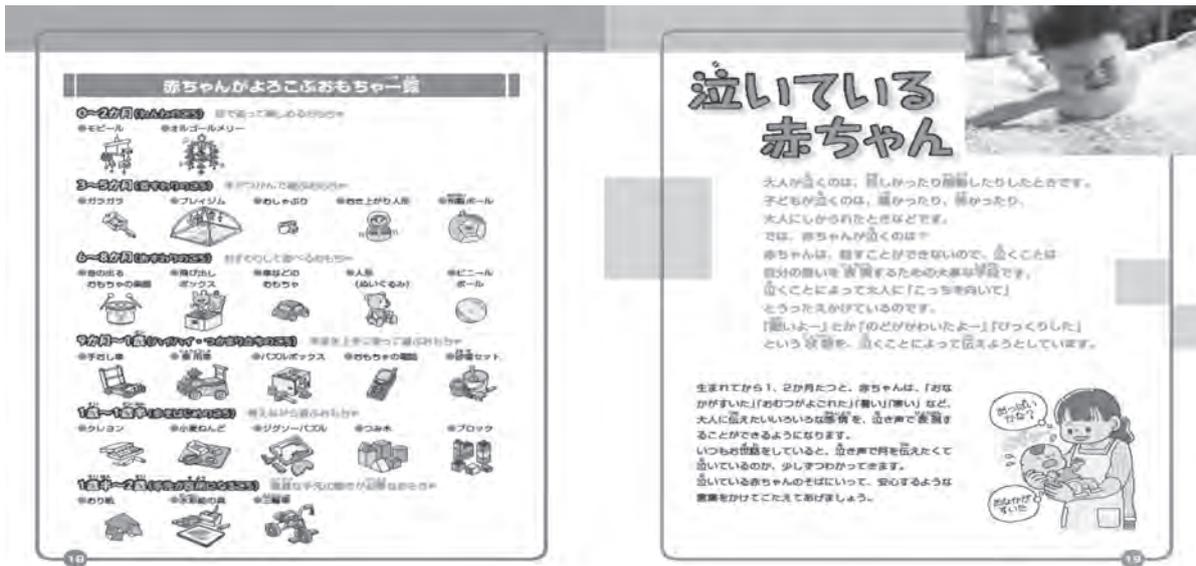
今後の保小連携の一助となりうる、保育園と小学校、そして地域の乳幼児とその親が関わる「赤ちゃんとのふれあい交流（事業）」のプログラムについて紹介します。

筆者は22年前からこのプログラムにかかわってきましたが、児童が職場体験・保育実習・育児体験などで保育現場を訪問する機会が増えてきています。そこで、実際に進めるうえでのプログラム例を以下に示しました。可能であれば、同じ児童に複数回来てもらい、乳幼児の育ちが感じられる体験ができるようプログラムを企画することが望ましいといえます。

この交流においては、『保育園、小学校の双方が互恵性をもつこと』が大切です。ふれあい交流や保育要録を提出することをきっかけに、お互いの子どもの様子を気にかけて、保育士・教職員同士の交流をはじめることが始めの一步です。また、どちらかが負担に思い始めると長続きしませんので、ご自身の保育園で無理なくできる部分から始めることをお勧めいたします。

	タイトル	交流内容	内容の解説
1	0・1・2歳の発達を学ぶ 赤ちゃんへの理解	〈事前学習〉 アンケートの記入	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート記入（事前に学校で記入も可） ・生徒が何を体験してみたいのか、保育士と話し合いを持つ ・保育士や看護師から0・1・2歳の発達や留意点を聞く
	どうして赤ちゃんは泣くのか (個性を知る)	人形を使った実習 (だっこ、おしめがえ) 卵ボーロをなめる ミルクをなめる	<ul style="list-style-type: none"> ・赤ちゃんが泣く理由について話し合う (泣く子泣かない子それぞれ個性があることを知る) ・首のすわらない人形を抱く、紙オムツに触れてみる ・赤ちゃんや乳幼児と接する時の注意事項を知る ・卵ボーロを噛まずになめてみる (乳児の歯が無い時の食べ方を学ぶ) ・薄味の意味を知る
2	はじめまして赤ちゃん (園児)	体験 (0・1・2歳児と遊ぶ) なめること・さわることを知る	<ul style="list-style-type: none"> *保育士や母親から赤ちゃんの様子を聞く ・おっぱいやミルク、おしめ替えの様子などを見る、なめること、さわること、這い這いの意味を知る。 ・赤ちゃんを抱く ・「人見知り」の意味を知る ・あやし、触れ合い遊びをする（絵本やおもちゃをつくって、遊ぶ）
3	3・4・5歳児を知る (保幼小連携)活用	3・4・5歳児と遊ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士から、幼児の発達や保育内容について説明を受ける。 ・月齢に合ったおもちゃの選び方や絵本の読み方、幼児の手遊び歌遊びを知る。室内遊びや園庭遊びを知る
4	私が赤ちゃんの時 園児時代の時を振り返る	自分を知る	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が赤ちゃんの時を知る（家族からの話を聞き、写真を見る） ・友達と赤ちゃんや園児の頃の様子を話し合う ・授業の感想やアンケートを記入後、自分の意見を語り合う

3) ふれあい交流プログラムのポイント



寺田清美著「赤ちゃんとおふれあおう1. 赤ちゃんの一日」(2012) 汐文社

①事前学習をしっかりと学ぶ(参照:上記「赤ちゃんとおふれあおう1. 赤ちゃんの一日」)

乳幼児の育ちや、0歳から15歳までの発達を理解をすることが、保・小学校連携につながります。このため、事前学習をしっかりと学ぶことが大切ですが、重要な点をあげてみます。

i 遊び方や遊具について

特に0・1・2歳の場合は、発達の程度に応じた遊び方を理解の上、遊具を用意することが大切です。

ii 泣くことへの理解

赤ちゃんが泣くことは否定的に見られがちですが、以下のことは大切に伝えましょう

- ・泣くことが赤ちゃんのコミュニケーションの大切な手段であることを理解する
- ・赤ちゃんが泣くのは悪いことではなく、大人の助けを求めていることを理解する
- ・赤ちゃんがなぜ泣くのかその意味を知る
- ・泣いている赤ちゃんの要求を理解することが、親、世話をする人の大切な役割であることを学ぶ

iii 赤ちゃんに対する接し方

- ・赤ちゃんが主体であること
- ・抱きたくても抱けない場合があること
- ・体調不良(風邪・下痢など)の日は接することができないこと

- ・爪を切る、髪を結ぶ
- ・赤ちゃんを揺さぶってはいけないこと
- ・赤ちゃんを抱くときに、抱く生徒が回り込んで抱かせてもらうこと
- ・おんぶの仕方に留意することなど

参加する児童だけでなく、かかわる教職員や学校コーディネーター（交流ファシリテーター）も一緒に乳幼児の発達を学びます。



(出典 寺田清美著「赤ちゃんとふれあおう2—赤ちゃんとのふれあい授業 (2012)」汐文社

②企画に児童の意見を組み入れる・自己評価を記入する

参加する児童が受け身ではなく主体的にかかわれるよう、「赤ちゃんとふれあい活動をする際に何をしたいか、どのような遊びをしてみたいか」等について、保育者の児童への聞き取りや児童のアンケート記入により、事前学習の中に盛り込むことが大切です。

またプログラム終了後、自分の感想・意見についてのアンケート記入により、自己評価の時を持ちます。秋田大仙市大曲地域の事例のように、振り返りシートを作成することは重要な学びとなります。(参照：129ページ)

4) 事業の効果と課題

体験学習や、このふれあい体験などがきっかけとなり、保育士を目指す学生は増加していま

す。

保育園をひとつの家族としてみると、児童が保育園に来て親子のような疑似体験をすることになります。児童は乳幼児の能力や魅力にふれることにより、心豊かな体験ができます。人への思いやりの心を育て、親となり子育てをする準備を自然に育んでいくことができるようになります。

これは育児不安や虐待の予防にもつながることと考えます。そして保育園の乳幼児も心豊かな体験をし、母親以外の人とのかかわりを持つ貴重な機会となり、さまざまな世代の人とかわる魅力を学んでいきます。

小学校の教職員からは、以下の感想が聞かれました。保育園理解が深まったとの言葉が多く聞かれます。

- ・この交流を通して保育園の存在が大変近いものを感じました。
- ・生徒たちは赤ちゃんとふれあうことにより、「責任感」と「思いやり」の心が育ち、クラスの友達同士にも優しい言動が増えてきました。特に男子の変化は女子に比べ顕著に感じられました。
- ・この交流をきっかけに、保育園の0歳から年長児まで知ることができました。年長児は予想以上に生活面で自立しており、入学当初は赤ちゃん扱いしすぎていたかと反省しています。
- ・入学後4月～6月頃までは、保育園時代のように手遊びを導入したり絵本を読みかたるように、伝えた方が効果的だと知った。

同時に保育士も児童の様子や、教職員の生徒への対応を見ることにより、保育園との言動の差に気づき、今後の保育活動に活かしていくことができます。このように直接関わることによりお互いに理解の輪が広がります。

(2) 保護者支援の必要性

平成20年に改定された「保育所保育指針」第6章には、保護者支援が多岐にわたり記載されています。それは取りも直さず保育者や保育園に、保護者の養育力向上のために貢献することが求められている時代に来ていることがうかがわれます。

保育園から小学校生活への滑らかな接続についても、当然のことながら保育園や小学校の努

力だけでは限界があり、家庭との連携や保護者への支援を行っていくことが大切です。

その際、保護者に対し「生活する力」、「かかわる力」、「学ぶ力」の「三つの力」（参照：12ページ）について伝えていきたいものです。

「生活する力」は、片付け、着替え、生活リズムなどの基本的な生活習慣です。保育園でも育んでいますが、家庭との連携は重要です。

「かかわる力」は、人と円滑にかかわる力です。自分を表現する力、自分自身と葛藤する力や抑制する力、コミュニケーション能力を、園でも家庭でも地域でも育てていくことが必要です。

「学ぶ力」は、学びへの関心や意欲です。絵本に対する興味、文字・数に対する興味、音楽や造形に対する興味、動物や草花に対する興味等です。家庭でも子どもの「三つの力」について関心を持って頂けるよう、保育園側からも積極的に働きかけていくことが大切です。

一例をあげれば、椅子に座って活動する時間を増やしたり、足を揃えて前を向いて話を聞いたり、立って並んで話を聞いたりすることや、季節感のある装飾やカレンダー・時計などの掲示を行い、掲示物への興味を高めることなどを取り入れる保育活動は、家庭生活にも十分活用できる内容です。「保護者の一日保育士体験」等の機会を利用してこのような活動をお勧めし、保護者を援助していくことができます。

(3) 今後の保育要録の方向性（参照：26ページ）

1) 保育要録の意義

① 保育園への提言

本協会のこれまでの3回の調査では、保育要録を作成することが保育士にとって大変な負担となっていることがわかってきました。しかし、保育要録は小学校に送付するという目的のためだけにあるわけではありません。保育要録を作成することで改めて子どもの育ちを振り返ることができ、保育士自身の保育を見直すきっかけにもなるのです。また、保育要録が媒体となって、保育士と小学校教員との交流のきっかけが生まれることにも大きな意味があります。保育要録が単に小学校へ送付するための形式的な書類とならないように、作成を担当した保育士にとっても大きな気づきやメリットがもたらされるものであってほしいと思います。

② 小学校への提言

平成23年度本研究調査では、保育要録を作成している保育園側には、「せっかく苦勞して保育要録を作っても、小学校では本当に活用してくれているのだろうか？」という疑問を持っていることが、明らかになりました。

「保育要録が確実に役に立つ。」という期待がなければ、作成意欲が萎えてしまうのは無理ありません。しかし、現状において保育園側で伝えたいと思う事と小学校側で知りたいと思う

事は必ずしも一致していません。保育園ではどのような思いで保育要録を作成し、小学校でどのように活用してほしいと考えているのかを小学校側に伝え、小学校側の意見を聴くことが必要です。そして保育要録は、子どもが保育園から小学校に入学する「接続期」のためだけではなく、子どもが小学校の6年間を順調に過ごせるように援助する資料となる必要があるのです。

③ 「育ちの連続性」の理解

保育要録は、保育園や幼稚園から小学校へ子どもの生活の連続性を支える資料として、より重要性を増していきます。

平成20年の文部科学省中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、「…小学校における教科学習への円滑な接続のための指導を一層充実するとともに、幼児教育との連携を図り、異年齢での教育活動を一層推進する。」とあります。この答申を受け、同年3月に、保育所保育指針（以下「保育指針」といいます。）、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、が初めて同時に改訂・告示されました。

保育指針では、小学校との連携について、「子どもの生活や発達の一貫性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、保育園の子どもと小学校の児童との交流、情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図ること。」とあります。

次に、小学校学習指導要領の生活科では、指導計画の作成と内容の取り扱いで配慮するものとして、「国語科、音楽科、図画工作科など、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第一学年入学当初においては、生活科を中心にした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。」とあります。

このような動きを捉え、保育園の「生きる力の基礎」、「5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）」、「生活と遊び・養護と教育の一体化」は、小学校の「生きる力の習得」、「すべてのこどもに一定水準以上の教育の保障」「教科」の何とつながっていくのか、「育ちの連続性」を理解しておく必要があります。

2) 保育要録記入方法の理解

これまでの調査研究を踏まえ、今後の保育要録の展開について考察します。第一に考えられることは、保育要録の様式や記入方法がより洗練されていくことです。保育要録の送付は、平成24年3月で3度目の送付を終えました。記入について幾分慣れたと同時に、様式については見直しの時期に入って来ている自治体もあることでしょう。また、今後保育要録の展開が進むにつれて、新たな課題も表出してくることが予測されます。幼稚園幼児指導要録との統合やこども園要録への移行も考えられます。

ここでは、保育要録の様式を今後検討するにあたっての重要な視点についてふれておきます。

保育要録は子どもが保育園から小学校へスムーズに移行するための資料であるため、そこに記される内容等が子どもにとって不利益とならないように配慮することが必要です。また、保護者からの開示請求にも対応できる内容でなければなりません。さらに、子どもや保護者はもちろん、保育園や小学校のそれぞれにとって有益となるような保育要録を作成していきたいものです。

①事実を中心に記入する

保育要録は保育園から小学校へ送付する公的な書類であり、また保育要録の中には子どもの生育歴や既往歴、家族関係といった、子ども個人や家族の非常にプライベートな事項に触れることも想定されます。保育要録に記載する個別的内容は必要最低限に留めるとともに、事実に基づいていなければなりません。特に家族関係や疾病や障害については特段の配慮を要します。例えば、疾病や障害では、医療機関などによる診断や認定があれば保育要録に記載することは可能ですが、推測や憶測で記入すべきではありません。

②具体的な子どもの様子がイメージできるようにする

保育要録が子どもの育ちを支える資料であることを考慮すると、読み手が子どもの姿や全体像をイメージできるように記入する必要があります。子どもの全体的な生育歴や保育園での生活の様子、性格や嗜好、保育園での生活や、日常生活においてどのような援助や配慮が必要であるかなど、小学校の教職員が保育要録を引き継いで子どもと関わる際に、「どのような子どもなのか」「どのように関わるべきか」といったことが把握できるようにしましょう。

③複数の人が見ても同一のイメージが持てるようにする

子どもの姿や全体像を把握できるように記入していくことは前述のとおりですが、同じ内容でも人によって見方は異なります。時には、記入した人とは全く逆のイメージを抱く人がいるかもしれません。そうなっては、保育要録の本来の目的が果たせなくなってしまいます。「同じようには伝わらないかもしれない…」、「人によって違った見方があるかもしれない…」ということを前提に、可能な限り同じイメージが持てるような表現を心がけましょう。そのためにも、作成した保育要録を複数の目で確認し合うことも大切です。

④イメージされる子どもの姿が肯定的になるようにする

保育要録でイメージされる子どもの姿や全体像は肯定的、つまり子どもの姿や全体像が「前向き」「プラス」にイメージされるように表現していく必要があります。これは、従来から保育園や保育士等が子どもと向き合う際に大切にしてきた姿勢であり、保育要録においても一貫

したいものです。

また、保育要録は、保護者が閲覧することも想定されます。このため、保育園や保育士等の子どもに向かい合う姿勢に対して保護者の不安や誤解を取り除くという点においても留意されるべき事柄といえるでしょう。そのためには、「～できない」、「～しない」といった否定的な表現は、特別な理由のない限りできるだけ避けるとともに、子どもが疾病や障害をもっている場合には特段の配慮が必要です。

⑤援助や配慮を要する際には、その場面や具体的な援助や配慮が伝わるようにする

就学前の子どもの姿を想定した時、基礎的な生活習慣や友だちとの人間関係など多くの生活場面で自立した姿が見られます。とはいえ実際には、子どもが安全かつ快適に生活ができるよう、保育士等による見守りや事前の環境構成などを含めたたくさんの援助や配慮が行われています。

個別に援助や配慮が必要となる場合、「〇〇をすることが苦手なので、△△な援助が必要」「〇〇な場面では、△△な配慮が有効」といったように、必要な事柄や場面、内容などが具体的に記されることが大切です。これによって、子どもの生活の場が保育園から小学校へ移行したとしても、周囲の大人の援助や配慮が一貫して継続されることにつながります。

保育所児童保育要録の事例 ここからは保育要録の事例を挙げて紹介します。

見本1 保育所児童保育要録

氏名	大月 真央	性別	男	学年	×××小学校
保育所名及び所在地	△△△保育園	山梨県甲府市×××			
保育期間	平成19年4月1日～平成22年3月31日(3年0か月)				

子どもの育ちに関わる事項

3歳より入園。弟が生まれた年少児(入園後)のころは、両親の目が届かなくなり、弟はじっと我慢をしているような状況もあった。現在は特に弟が本気で泣いたりする時間を大切に、弟もそのことを喜んでいる。

健康(生命の保持及び情緒の安定)に関わる事項	(子どもの健康状態等)
<ul style="list-style-type: none"> ・病気が多いので、おむつが湿る。 ・新しい場所や、初めての人の前におどろくことが多くなかなか入園しずらい。 ・ういっという状況は、平常態になることもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・病気が多い(過去)。

教育(発達運動)に関わる事項

健康	人間関係	表現	生活	読書
<ul style="list-style-type: none"> ・病気が多いので、おむつが湿る。 ・自分の体を十分に動かして、運動が苦手なところがある。 ・積極的な活動に参加する意欲や関心を示さない。 ・生活を楽しむ、自分の力で行動することの意欲や関心を示さない。 ・身近な人との関わり、関わりを深め、愛情や信頼感を育む。 ・社会生活に関わる関心や意欲や関心を示さない。 ・身近な環境に関心し、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。 ・身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、電気をたたく、おむつを脱ぐなど興味を示す。 ・身近な事象に関心し、電気をたたく、おむつを脱ぐなど興味を示す。 ・自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体を動かすおそびを好み、友達を誘って大の字など寝ることを楽しむ。 ○自分の気持ちを相手に伝える意欲や関心を示す。 ○言葉で自分の気持ちを伝える意欲や関心を示す。 ○人前で自分の経験した出来事や思いを話したり、相手の話を聞いて楽しむ。 ○歌が大好きで、子ども同士でも声を合わせて歌い、楽しんでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○季節の変化を感じ、石、花、葉など自然のものを集めて、よ(あそび)。 ○季節の飾りをつけて飾ったり、花の絵や折り紙など、季節の飾りを作る。 ○人前で自分の経験した出来事や思いを話したり、相手の話を聞いて楽しむ。 ○歌が大好きで、子ども同士でも声を合わせて歌い、楽しんでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○季節の変化を感じ、石、花、葉など自然のものを集めて、よ(あそび)。 ○季節の飾りをつけて飾ったり、花の絵や折り紙など、季節の飾りを作る。 ○人前で自分の経験した出来事や思いを話したり、相手の話を聞いて楽しむ。 ○歌が大好きで、子ども同士でも声を合わせて歌い、楽しんでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○季節の変化を感じ、石、花、葉など自然のものを集めて、よ(あそび)。 ○季節の飾りをつけて飾ったり、花の絵や折り紙など、季節の飾りを作る。 ○人前で自分の経験した出来事や思いを話したり、相手の話を聞いて楽しむ。 ○歌が大好きで、子ども同士でも声を合わせて歌い、楽しんでいる。

この姿を伝えたい!

3歳頃の弟のいる真央くん。弟が生まれたときの寂しさを乗り越え、友達にも積極的に関われるようになりました。弟の存在が、年下の子どもを思いやる優しさへと変わっていったことを伝えたいと思います。

大切な家庭環境が記入されています。さらに子どもの育ちも書くことでよいでしょう。家庭環境が子どもの精神面に影響を及ぼす場合は、このように状況を書くことも大切です。さらに子どもの入園時の心身の育ちを書くことも大切です。

年少児のときは、積極的に友達に話しかける姿があまり見られなかったが、年中児になると、仲の良い友達が増えて明るく積極的になった。年下の子どもを思いやる気持ちも強くなり、声をかけたり、助けをたたりすることが多い。

「子どもの育ちに関わる事項」と関連づけましょう

「子どもの育ちに関わる事項」で、友達との関係や、年下の子どもへの関わりについて、本児の特性を踏まえて的確に表現した記述です。「教育」のところでもそれを踏まえて書くようにしましょう。

具体的なあそびの内容を書きましょう

自然物を使い、紙やひもなどで制作することを楽しむのが、あそびの傾向を伝えます。

季節の変化を感じ、石、花、葉など自然のものを集めて、よ(あそび)など季節の飾りをつけて飾ったり、花の絵や折り紙など、季節の飾りを作る。

寺田清美著「保育所児童保育要録書き方ガイド」(学研教育出版)より

3) 今後の保育要録の展開

①保育要録をきっかけとした保小連携のあり方

保育要録の問題点や課題がいろいろと明らかになってきましたが、保育要録だけで保小の連携を完璧に推進するには限界があることも事実です。保育要録をきっかけとして、保育士と小学校教員が直接顔を合わせ、詳細に打ち合わせる機会が必ず必要になるでしょう。保育要録によって幼児期の子どもの育ちにふれれば、小学校でのスタートカリキュラムに活かすこともできます。スタートカリキュラムでは、保育園での子どもの遊びや生活を一部取り込んで組み立てることもありますから、日ごろから互いに保育園の保育を体験する「一日保育士体験」をしたり、小学校の授業を参観することも必要になってくるわけです。

②保小連携に関する地方自治体の役割

保小連携の推進状況には、園長や校長のリーダーシップが大きく影響していることがわかっています。同時に、その市町村の所管部署の体制によって左右されることも事実です。

子どもは一つの保育園から複数の小学校へと進学してゆきます。小学校の方も、複数の保育園や幼稚園からの進学も合わせて受け入れるわけですから、あまりバラバラな対応をしても連携が成り立たなくなってしまうのです。

保育要録の様式の統一や保幼小連絡会議の設置などは、自治体が主導で推進しなければスムーズに進んでゆきません。保小連携のより充実した連携段階は、「線」（保育園－小学校）ではなく「面」（自治体全域）で連携してゆくことです。地域の保育園・幼稚園、小学校が互いに連携できるような行政主導の仕組みづくりが求められています。

(4) 富山県内での取り組み

富山県では、「社会に学ぶ14歳の挑戦」という、平成11年に始まった県独自の取り組みがあります。「地域の子どもは地域で育てましょう」をスローガンに、県内の中学2年生が職場体験や福祉・ボランティアに一週間参加する活動です。この一環として、保育園や子育て支援センターとの交流事業があります。

さらに、富山市のほりはら保育園では、45年にわたる園の歴史の中で地域とともに歩むことを重視し、「14歳の挑戦」後に卒園児が日常的に保育園に来て一緒に行動する企画にも取り組んでいます。

また、富山市の常盤台保育園では、中学3年生の技術・家庭科の授業の一環として、「保育」の授業が15年前から行われています。将来親となる中学生が、乳幼児とのかかわりがないうまま親になっていく今の時代に、少しでもかかわれる機会を提供したい、との思いから始めたそう

です。中学生となった卒園児も参加するため、保育者は大人との中間点にある卒園児に再びかわることのできる喜びを感じるそうです。

生徒は来園する前に、授業の中で乳幼児の発達（身体・行動・言語）を学んだ上で、どのような遊びが好まれるか、また適しているかをいろいろと考え、おもちゃや絵本などを手作りし、遊びの中で生かしているようです。

「14歳の挑戦」に始まり、その後は親としてパパ・ママ体験、保護者として保育園にかかわる姿は、保育園を核とした理想的な保小中連携につながる地域連携ではないでしょうか。「遠くの親戚より近所の保育園」、まさに実家のような保育園は、小・中学生の訪問事業から一步前進した地域連携保育園の姿といえるでしょう。

(5) 秋田県内での取り組み

1) 行政・地域の取り組み（参照：39ページ）

「秋田びじょん」（秋田のイメージアップから観光誘客及び県産品の消費拡大へとつなげるため、全国の方々が「秋田」に目を向けるきっかけとなる、新たなキャッチコピー）を打ち出した同県では、家庭教育を大変重んじており、地域連携も先進的な地域です。この地域の取り組みは、子どもたちの発達や学びの連続性を保障し、就学前と小学校の双方の立場から接続期のあり方を共有するため、教職員が互いの教育現場に身を置き、発達観、教育観及び指導観等を体得し合うことができるようにすることを目的として連携の取り組みがはじまりました。

秋田県教育庁南教育事務所では、各園の要望に応じて保育園の保育内容を視察し、保育計画から指導内容まで丁寧に助言しています。そのような機会を県が設定しているところに、行政としての役割意識を感じます。現在はワークショップ型の話し合いを通して、各保育園の特色を生かした指導計画の見直しや自己評価、保育の質を高めることに力を入れています。また、事務の簡素化を図り、その余力を子どもの保育に向けています。

保育士と教職員の連携が望まれています。一緒に研修を受けることは、全国的にはまだ少ないことが現状かと思われます。大仙市教育委員会では、保育園・幼稚園・小学校の保育士や教職員と一緒に研修を受けています。また、同市では保育や授業をお互いに参観したり、参観後に協議会や事例検討会を行っています。筆者も、平成23年11月と24年11月にこの地を訪問し、大仙市および仙北市の保育者の研究熱心さにふれ、保育の専門性の高さには脱帽致しました。また、見学した保育園の園児たちの溢れんばかりの笑顔と、温かみのある保育環境が心地よく、大変魅せられてまいりました。

2) 社会福祉法人大曲保育会の事例

①保育要録に関する疑問をアンケート実施により解消した事例（参照：40ページ）

「送付した保育要録は、小学校において本当に読まれているだろうか？」という疑問は、保育士共通の関心事といえます。なぜなら保育士は保育要録を、年度後半の多忙極まりない時期に必死の思いで書き上げているからです。この疑問について地域における差異は見られず、全国各地の保育園からあげられた率直な意見といえます。このように、保育要録を疑心暗鬼になりながら作成することは改善すべきですが、行動を起こさなければ何も変わりません。

大仙大曲保育地区会長はこの疑問を解消すべく、大曲保育会園長会メンバーと協議を重ね、保育要録に関するアンケートを作成し、小学校へ送付しました。このことにより、送付先小学校のすべてにおいて読まれていることが分かり、送り手である保育士の疑問も解消され、今まで以上に小学校との連携が密になりました。園長会が活発に活動の輪を上げたことが成果に導いた、まさにボトムアップの事例といえます。保育要録をより有意義なものへ発展させていくための試みの一つとして、このような追跡調査は効果があることが示されました。

保育要録が本当に小学校において読まれているのかと疑心暗鬼になっている保育園は、このようなアンケートを送付してみることも連携への足掛かりになるかと思われまます。待っているのではなく保育園からの小学校へのアプローチも必要でしょう。

②保育園と小・中・高校との連携の実践事例（参照：47ページ）

大曲乳児保育園では、平成23～24年度の2回に渡り、保育園と高校とのふれあい交流活動を実施し、ミルクにおむつ替え、抱っこなどの体験をしました。昨年は県の事業として行いましたが、2年目の今年度は、子どもたちの成長を高校生に見てもらいたい、という園長や職員の思いから保育園独自で計画し、高校生の夏休みと冬休みの2回実施する予定を立てました。ここに、保育園側の質の高い役割意識を感じます。

また、大曲東保育園では、小・中学校との連携が活発に行われています。一例をあげますと、参加した中学生は保育園交流を振り返り、学びの内容や自己評価を記入しています。保育園と中学校の丁寧な取り組みは、生徒の乳児理解の学びとなります。また、園児は、かかわりの深くなった生徒に兄弟のような親密感を抱き、その様子を保育士や教員が垣間見ることにより、育ちの連続性を支える効果につながっているように感じます。

赤ちゃんとのふれあい ～太田中学校職場体験学習～



(0歳児の保育室にて)



(6) 0歳児から接続期を見据えたカリキュラムの事例（参照：23ページ）

～「乳幼児教育実践のてびき～のびのび育つ しながわっこ」（東京都品川区）

保小連携の対象となるのは、一般的には幼児（年中・年長）と小学生ですが、0歳からの育ちを支える保育園だからこそ、0歳から小学6年生までの成長を連続してとらえ、年齢の組み合わせを考慮した連携を取ることも大切です。そこで、ここでは、筆者自身も「保幼小連携の推進に関する検討委員会」副委員長としてかかわった、品川区の接続期プログラムや指導計画を紹介します。0歳児から接続期を見据えた丁寧なカリキュラム実践を行っています。

1) 内容（品川区のホームページより）

品川区では、平成17年度に保育園と幼稚園を所管する窓口を一元化、平成19年度には、保育園保育士・幼稚園教諭・小学校教諭が集まり、子どもに関するすべての施設で活用できるような保育教育課程を策定いたしました。品川区のすべての子どもたちが等しく質の高い保育・教育を受け、聞く、待つ、座る等の基本的な生活習慣をしっかりと身につけて小学校に入学し、無理なく教育環境に馴染んでいけるよう就学前教育を実践します。

そして、平成23年12月に、さらなる保育の質の向上、保幼小連携の充実を目指して平成19年度に作成した「のびのび育つしながわっこ」を見直し、「保幼小ジョイントカリキュラム」を生かすとともに、保育園・幼稚園の保育・教育活動の実情に応じた改訂版を作成しました。

- i 保育教育課程（0から就学まで 保育園の保育課程と幼稚園の教育課程を併せ持つもの）
- ii 小学校との連携・交流
- iii 乳幼児の一日をデザインする
- iv 特に配慮を必要とする子どもへの支援
- v 保育者の育成・能力向上
- vi 自己評価・外部評価
- vii 地域との連携・子育て家庭に対する支援
- viii 保育・教育の実践事例
- ix 保育・教育活動の教材紹介
- x 保育園・幼稚園における防災と安全

2) 指導計画

i 生活する力（主に、身辺自立や生活習慣等に関する力）

①教室環境 ②一日の生活時程 ③身の回りの始末 ④食事・排泄

ii かかわる力（入学後に会おう友達や数多くの教員との関係づくりなど、大きな集団での人

間関係に関する力)

- ⑤規範意識 ⑥聞く・話す・伝え合う ⑦友達との関係づくり ⑧学級の一員としての担任との関係

iii 学ぶ力（小学校での教科学習の基礎となる興味・関心や学習意欲、能力等）

- ⑨学びの芽生え ⑩運動・表現

筆者自身、品川区の公開保育助言者としてかかわる中で、上記の①～⑩項目を意識した形で0歳児からの指導計画が立案され、日常の保育の中で活かされていることや、単に理論だけではなく、0歳からの育ちの連続性が保育現場において立派に息づいていることを感じています。

3) 「発達の特徴と育ちの連続性」「保護者に伝えたいこと」

「0から就学まで保育園の保育課程と幼稚園の教育課程を併せ持つ」ことを視野に入れた指導計画が立案され、日常の保育に活用されていることを紹介します。

特に着目したい点は「保護者に伝えていきたいこと」、「気をつけよう」(参照：20ページ)で、発達の特徴と育ちの連続性を重視する中に、保護者に伝えていくべきことを組み入れたのは、高く評価できる点であると考えます。

(7) おわりに

新しい幼保一体化の流れの中で、保育・教育界は課題山積です。しかしながら、子どもの健全やかな成長のためには、家庭や地域社会との連携、協力が欠かせません。子どもの人権擁護、虐待防止の観点からも、保育園の果たす役割が大きいといえます。子どもの自発的、主体的な活動を重視するとともに、子どもの生活の連続性、発達の連続性、遊びや学びの連続性と関連性を大切にしながら、保育園ならではの特性を生かした質の高い保育実践と小学校の連携を充実させてまいりましょう。それは、取りも直さず「子どもの最善の利益」につながることでしよう。

本事例集がこれからの保育園と小・中学・高校・地域との連携のご参考にしていただけることを心から願っております。

《文献》

- 1) 無藤隆・和田信行・寺田清美監修「～保幼少ジョイント期カリキュラム～しっかり学ぶしながわっこ」(2010) 品川区役所
- 2) 寺田清美 (2009) 保育所児童保育要録書き方ガイド 学研
- 3) 原田正文「子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子どもの虐待防止」(2006) 名古屋大学出版会

- 4) はじめてのペアレンティング研究会「第1回妊娠出産子育て基本調査」(2007) ベネッセ次世代育成研究所研究所報Vol.2
- 5) 伊藤葉子「中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習」(2006) 風間書房
- 6) 佐々木綾子・末原紀美代・町浦美智子・中井昭夫・波崎由美子・松木健一・田邊美智子「青年期の親性を育てる「乳幼児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究—心理・生理・内分泌学的指標による検討—」(2007) 福井大学医学部研究雑誌、8、17-29
- 7) 寺田清美「赤ちゃんと小中高生とのふれあい交流事業(授業)の重要性—スタッフとして現場からの声」(2005) 東京成徳短期大学紀要、第38号、45-56
- 8) 寺田清美「父親を子育てに巻き込むさまざまな試みの事例—父親準備性を育む活動の広がり」(2008) 『世界の児童と母性』10月号、公益財団法人資生堂社会福祉事業団、55-58
- 9) 寺田清美・小泉左江子・田中規子「大学生の「赤ちゃんと体験」についての調査と分析—「接触体験」と「観察体験」の有効性—」(2013) 東京成徳短期大学紀要第46号
- 10) 厚生労働省「保育所保育指針」(2008) フレーベル館
- 11) 寺田清美「赤ちゃんとふれあおう1. 赤ちゃんの1日」(2012) 汐文社
- 12) 寺田清美「赤ちゃんとふれあおう2. 赤ちゃんとのふれあい授業」(2012) 汐文社
- 13) 古本好子「地域における子育て支援に関する調査研究報告書」4章p72、(2012) 日本保育協会
- 14) 富山県民間保育連盟「パパママ保育士」事例集(2012)

*なお、この文章は、保育所保育指針などの引用部分は「保育所」と表記し、それ以外は、一般的に保育園の使用がみられるため「保育園」と表記しました。

保小の連携に関する調査研究委員及び執筆者一覧

寺田 清美（東京成徳短期大学教授）

和田 信行（東京成徳短期大学教授）

小島 伸也（富山県・はりはら保育園園長）

藤野 輝久（三重県・野町保育園副園長）

栗本 広美（大阪府・白鳩保育園園長）

馬場 耕一郎（大阪府・おおわだ保育園園長）

小林 公正（兵庫県・枚田みのり保育園園長）

福嶋 義信（熊本県・合志中部保育園園長）

保小連携に関する調査研究報告書

発行：平成25年3月

発行所：社会福祉法人 日本保育協会

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5丁目53番1号

電話 03-3486-4412（代） FAX 03-3486-4415

URL：<http://www.nippo.or.jp/>

本書の内容あるいは全部を転用、複製複写（コピー）する場合は、法律で認められた場合を除き、当協会あてに許諾を求めてください。

